

【書評】

田村信一『ドイツ歴史学派の研究』

日本経済評論社，2018年，viii + 345頁

本書は、ロッシャー、シュモラー、ゾンバルトなど代表的経済学者たちの主要業績を綿密に検討することを通じてドイツ歴史学派の経済思想の全容に迫ろうとする力作である。著者田村信一氏は、これまで特に『グスタフ・シュモラー研究』（1993）によってわが国のドイツ経済思想史研究をリードしてきたが、本書は『シュモラー研究』刊行以降の田村氏の四半世紀にもおよぶドイツ歴史学派研究の成果をとりまとめた、その意味で氏の研究の集大成とも言うべき、重厚な作品である。

本書は、全9章と補論からなる。第1章「ドイツ歴史学派」では、「歴史学派」という呼称がメンガーとシュモラーの方法論争に起因する事実が指摘されるとともに、いわゆる「旧歴史学派」（ロッシャー、ヒルデブラント、クニース）を学派の「先行者」と位置づけ、学派の実質的な「成立」を社会政策学会の創設とシュモラー、ブレンターノ、ビューヒャーらの知的営為に結びつける。田村氏は、「新歴史学派」と呼ばれたこれらの学者を学派の「旧世代」と見なし、理論と歴史との統合を意識しつつ「資本主義」研究を牽引したゾンバルトとヴェーバー、さらにはシュンペーターらを「新世代」として捉える新機軸を打ち出したうえで、彼らが共有する問題意識が資本主義の「生成」・「発展」のみならず、むしろその「終焉」にあったことに注意を喚起する。本章は、氏自ら「私のドイツ歴史学派研究のひとつの到達点」(329)と語るだけあって、学派の中核をになう論客たちの主張と世代ごとの主要な問題意識が手際よく整理されており、巻頭を飾るのに相応しい玉稿といえ

る。

以降の各章は、第1章で明示された個別の重要な論点をさらに深化・拡充するために配されている。すなわち、第2章ではロッシャーを「歴史学派の創設者」とする通俗的な理解が糾される一方、彼と古典派との内面的親近性が浮き彫りにされ、また第3章では歴史学派の方法論における「理論と歴史」をめぐる世代間の相克が、ロッシャー、シュモラー、ゾンバルトという三世代の線上で丹念に辿られる。さらに著者の本領である第4・5・6章のシュモラーに関する論説では、彼の社会政策、経済社会学の展開とその根底にある方法論が扱われている。そこでは自然的・技術的原因にくわえて歴史的・社会的原因の探究を重視するシュモラーに特有の経済現象へのアプローチが別出されるとともに、彼の社会政策の核心が「配分的正義」の理念によってプロレタリア（無所有の貧民）から中産階級を創出することにあつたことが強調される。著者によれば、かかる政策論の背景には、純粋科学としての古典派的な経済学を社会学へと拡大しようとするシュモラーの志向があつた。

さて、第7章では「新世代」の旗手の1人、シュルツェ＝ゲーヴァニッツの社会政策思想が照射される。ドイツにおける「社会平和」の達成のためにイギリスの労使協調路線の思想的淵源を探ったシュルツェは、功利主義・個人主義からの脱却を目指したカーライルのピューリタンの労働観に傾倒しつつ、他方ではブレンターノから継承した高賃金・高能率労働の実現によって「新しい中産階級」を輩出し、「窮乏化理論」に対抗しようと企てた。

かかる構想の前提としてシュルツェは、大工業的経営の推進を支持し、ついには「近代帝国主義の文化的正当性」を唱道するにいたる。シュルツェに内在した本格的な研究がほとんどないわが国において、本章は今後のシュルツェ研究の礎となる貴重な成果といえよう。

第8章と第9章では、ゾンバルトの経済思想に関する卓抜な分析が行われている。まず第8章の課題は、『近代資本主義』初版(1902)の内容を精査し、その意義を解明することにある。著者によれば、初版は、①シュモラーが訴える中産層保護政策に対して「資本主義の発展の不可避性」を論証することと、②理論と歴史を統合して方法論争を克服することを目的としたが、同時代へのインパクトとして強調されるべきは、本書によって初めて「資本主義 Kapitalismus」という言葉がドイツのアカデミズムに導入され、さらに「資本主義的精神 kapitalistischer Geist」という術語が最初に現れたことであった。つまり「資本主義的精神」という言葉を最初に用いたのはゾンバルトであり、彼の問題提起を受けてヴェーバーは「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」でその考え方を批判したのである。研究史では、大塚久雄に見られるように、ヴェーバーの「資本主義の精神」をゾンバルトが誤読したかのような評価がなされてきたが、この点を修正したのは本章の重要な成果の1つと言ってよい。続く第9章が扱うのは、ゾンバルトのエコロジー論である。『近代資本主義』第2版(1916-27)では、近代技術と資本主義の発展によって生じた「物質文化」批判が強化され、それとの関連で資本主義終焉論が展開される。かかる悲観的展望の背景にゾンバルトの環境問題に対する実

践的な活動があったという指摘はそれ自体興味深いが、この事実は彼の「終焉」論に現代へと繋がるアクチュアルな内容が含まれていることと無関係ではない。

ドイツ歴史学派に対する関心は、わが国では戦後長らく希薄であった。その有力な理由の1つとしては、経済的合理性を欠いた戦時期の「日本経済学」の台頭が「歴史学派復興」と呼応する形で生じたという事実が挙げられよう。小林昇の歴史学派に対する「嫌悪感」がこの点に起因するという「補論」での考察は、重く受け止められなければならない。もちろん同様の事情は、ナチスを生んだドイツにも該当しよう。しかし他方で、形式的理論を重視するあまり、現実世界から遊離しがちな新古典派経済学への懐疑・反省からドイツ歴史学派の議論の可能性が改めて注目されるようになったことにも留意する必要がある。1980年代以降のこうした動きは、学派の個々の論者に真摯に向き合う契機となり、そのなかで彼らの議論に胚胎する現代的意義が見直されることにもなった。シュモラーの「倫理的な」方法論、壮大な経済社会学を彫琢した田村氏の努力は、まさしくそうした歴史学派を再評価する研究動向の先駆けであったといえよう。すでに紹介したように、本書ではシュモラーとゾンバルトを中心に据えながらも、氏の眼差しはドイツ歴史学派全体にまで及んでいる。本書をスプリングボードとしてなお残された個別のトピックをさらに追究していくことが、後学に課された使命であろう。ドイツ歴史学派研究の新しいスタンダードワークが、その道の泰斗によって上梓されたことを心より喜ぶたい。

(奥山 誠：明治大学)